



## 一の瀬橋と蛍茶屋

写真に見る

115年前の長崎

日露戦争時代

一順野 姫

□ 18 □

名・瀬川(藤左衛門)が私財を投じ、中島川上流の一の瀬川の溪流に架けられた第四番目の石橋。長さは9.5m、幅は4.9mである。道隆は前妻慶林の没後、後妻に代官末次平蔵の娘を迎えるが、その妻・法春院も慶安5(1652)年に病没した。その法要追善として、日見峠への道筋に当たるこの場所にアーチ式半円の石橋を設けた。ここは旧長崎街道の玄関口であり、長崎を旅立つ人と見送る人が別れを惜しんで酒を酌み交わした場所である。江戸時代には長崎八景の七番「市瀬晴嵐」に数えられ、晴れ渡った日に山峡の深谷からかすみがち立ち昇る景勝地であった。長崎市内に電車が走る大正4(1915)年以前には、約1100台の人力車が市内を走っていた。

(長崎外国語大学長)

写真は明治30年代の一の瀬橋と蛍茶屋(長崎市本河内町)。一の瀬橋は明治20(1887)年に架け替えられており、まだ新しい。橋脚の口一マ字「ICHINOSE」の文字はこの時に刻まれたようである。蛍茶屋はフリーチエペアトが元治元(1864)年に撮影した1階建ての粗末な建物から、2階建て料亭風の立派な茶屋に変身している。店先には「蛍茶屋」の看板も見える。橋と茶屋の間に4基の石碑を確認できる。これらは現在、左奥の崖下に移設され、「蛍茶屋跡」の標識のもとに集められている。この企画の過去の記事、写真は長崎外国語大のホームページ (<http://www.nagasaki-igo.ac.jp/recnas/newspaper/>) で見ることができま

す。ここに集められている。この企画の過去の記事、写真は長崎外国語大のホームページ (<http://www.nagasaki-igo.ac.jp/recnas/newspaper/>) で見ることができま

# 旅人を送り迎えた景勝地



長崎外国語大のホームページにアクセスできるQRコード

随時掲載します